目白大学　人文学研究
第４号　2008年　217－228

映画字幕に見るその工夫と英語学習への利用

What We See from Subtitles

古川尚子
(Shoko FURUKAWA)

キーワード：映画字幕、字幕監修者、シナリオ
Key Words：subtitles, scripts, movies

１．はじめに

ほぼ10年前になるが、当時の短期大学英語英文科では恒例の講演会で映画字幕に関しては第一人者であり、通訳者としても活躍の戸田奈津子氏を講師として迎えた。その時点でも30年近いキャリアを持つ戸田氏の講演の内容は非常に興味深いものであった。特にもともと小学校の低学年の頃より祖母、叔母に連れられ、映画、その中でも洋画をよく観ており、映画大好き人間としては、講演の前に主催者としての挨拶という名目のもとに映画に関わる様々な話を個人的に聞かせてもらえるという幸運に恵まれた。後に触れるが、映画字幕作りは翻訳の作業とは異なるものである。しかし、英語の台詞を聴き、字幕を読むとき、さすがプロだと感心させられる。短い台詞は別として、字数、その他の制約がある字幕は役者が口にする台詞とは大きな違いがあるが、いい得て妙、よくこのような日本語表現が出てくるものと思う。英語を日本語に言い替える時、あまりに真面目に、律儀に翻訳するため、えてして日本語として奇異なものになる場合が多い。そのような時に、いかに分かり易く、シンプルに、そして当を得た日本語にすることができるか。映画はリスニング、スピーキングの材料として以外にも英語学習用教材としての活用価値が大きいものがある。

２．映画字幕について

日本では外国映画を観る場合、現在は映画によっては字幕版と吹き替え版があるが、主流は字幕版である。少し前までは字幕版のみであった。日本以外の国々の場合、殆どが吹き替えである。かつてスペイン、バルセロナの映画館でアメリカ映画を上映していたので、当然台詞は英語で、スペイン語の字幕がついているものと思い込んで入館したところ、アメリカ人の俳優はスペイン語を話していた。外国映画は字幕が付いているものという先入観、世界の殆どの国では吹き替えで映画を楽しむという事実を知らなかったためである。外国映画を鑑賞する時、字幕と吹き替えでは印象が全く異なる。日本で字幕のほうが好まれるのは何故であろうか。外

ふるかわしょうこ：外国語学部英米語学科教授

国映画を字幕で観ることに抵抗がない、むしろ積極的に字幕を支持する。映画の中で言語の果たす役割は大きいものがある。言語はそれが話される地域での文化そのものであるから、その言語を含めて映画を楽しみたいという意識が強いのであろう。文字を読む必要のない吹き替えの方が面倒でないが、それでも我々は原語で外国映画に触れる喜びを優先させる。現在は日本人の活字離れが問題になっているが、それでも殆ど誰でも字を読むことができるという日本の状況も影響しているのは確かである。

日本で映画に字幕がはじめて付けられたのは昭和６年（1931年）、ゲーリー・クーパー、マレーネ・ディートリッヒ主演、パラマウント映画制作「モロッコ」であった。それ以前は徳川夢声氏でよく知られている弁士がつくか、場面と場面の間に文字で説明の入る無声映画であった。トーキー時代の到来である。「モロッコ」に字幕を入れたのは田村幸彦氏であるが、日本初の字幕が付けられるまでの顛末は清水俊二氏が彼の著書の中で詳しく述べておられる。「モロッコ」はいわゆるパイロット、テストケースとして字幕が付けられたものであるが、もしこの試みが成功しなかったならば、その後の状況は変わっていたかもわからない。「モロッコ」は大ヒットしたのである。そのため、それ以降の外国映画には全て字幕が入れられることとなった。ただその時点では字幕を入れるという作業が日本では出来ないため、その後２年間は字幕を入れる担当者はニューヨークに滞在することを余儀なくされたそうである。今でも字幕はスーパー、あるいはスーパー字幕と呼ばれることが多いが、これはsuper imposed titlesを略したものである。当時、日本に入ってくる映画の数は現在とは較べものにならない程少なかった。映画最後のクレジットに登場する字幕監修者も今思えば清水俊二氏、高瀬鎮夫氏、秘田余四郎氏の名前が記憶に残っている。字幕初期の状況を知る人は今は少なく、映画の生き字引といわれている故淀川長治氏によると、最初は字幕を入れる位置から大きな問題になったそうである。日本語は縦書きが常識であったので、スクリーンの右側に入れることになった。その後もスクリーンのあちこちに入れてみて、試行錯誤の時代があったようである。確かにかつてはスクリーンの右側に字幕があるのが当然のように思っていた。現在はスクリーンの幅が広いため、スクリーンの下方に横書きで入れられていることが多い。又、入れる文字数も問題であった。言葉は口でしゃべるよりも読むほうが時間がかかる。台詞をそのまま文字にして字幕にしたのでは長くなりすぎて読むことができない。台詞がしゃべられている数秒の間に読みきれるように字幕を作る必要がある。観客がどの位の文字数を読むことができるか、何人かの人に映画を観てもらい、とりあえず１秒に３、４文字、１行13文字というルールを作ったそうである。当時のフィルムは縦の長さは現在と同じであったが、横は短いものであった。13文字というと画面の上から下までぎっしりで、映写の状態では上下が切れてしまうこともあり、その後12文字、11文字と徐々に減り、今は10文字になっている。次に字幕を作る際のルールがいくつかある。字幕を作る時に最も大切なことは観客に読み易く、分かり易いということである。観客は瞬時に字幕を読み取るのであるから、様々な解釈があり得るものであってはならない。字数が限定されているのであるから、ある程度の省略、意訳、はやむを得ないが、それが行き過ぎであって

はならない。次に漢字の使用に関する制約である。字数を制限されているため、短い字幕を作ろうとすると、どうしても漢字を使いたくなるが、使える漢字が少ないため、思うような字幕が作り難い。映画の観客には漢字を読みにくい人も多いため、その人々に対する配慮である。一方、漢字が使えず、かなばかり多くなると字幕を見ただけで意味を知ることが難しくなる。漢字とかなでは読んで理解するまでに必要な時間に違いがあることは周知のことである。1966年の時点で清水俊二氏が「ちかごろの日本語はスーパー字幕をつくる人間にとってたいへんいじわるになってきている。漢字がいちじるしく減って、ボキャブラリーがひじょうにすくなくなっているからである。ぼくはいつも字幕をできるだけやさしくするようにこころがけているので、むずかしい字を使わないことには大賛成だが、かぎられた字数のなかにせりふの意味を正直に、そして完全にもりこもうとすると、制限漢字を使わなければならない場合もおこってくる。」と述べておられる。40年前のことであるから、現時点ではもっと漢字の使用が減っているにちがいない。戸田奈津子氏も著書の中で次のように言われている。「私はだれでもが読める字幕を心がける。僕はつかうが、俺は使わない。２行20字のなかで、主語のおれと俺の１字の差は大きいが、日本語のルールである以上、できるだけ守りたい。だが、鉤の手を持った海賊がズバリ題名のフックのような映画の場合、鉤という字の平がなは文章のなかで大変よみにくく、そのうえ鍵と混同する。子供が大勢観にくる映画とわかっていても、やむを得ず鉤というむずかしい漢字を使って、ルビをふる。その代わり字数のほうをさらに２、３字減らして、読みきれない人がいないような配慮をする。カタカナだけの電報が読みづらいように、ぜんぶ平がなという字幕は読みにくい。１字漢字を入れることで、はるかに読みやすくなる場合があるし、またビジュアルな感覚からも字幕がひきしまる。例外のないルールはないということである。」 言葉に関しては、アメリカ映画は60年代末から70年代にかけて劇的な変化があったといわれている。かつて、「風と共に去りぬ」のラストシーンでのレット・バトラーの台詞は原作では、“Frankly, my dear, I don't give a damn.”であったが、“damn” を映画で使うことは禁じられていた。そこでプロデューサーのディビッド・O・セルズニックはクラーク・ゲーブルに２通りの台詞を用意して撮影をしたそうである。“Frankly, my dear, I don't care.” であるが、この台詞は原作ではあまりに有名であり、映画の劇的効果のため、彼は悩んだ結果、５千ドルの罰金を覚悟して、原作どおりの台詞を選んだという。ベトナム戦争以前のアメリカ映画は台詞、その他の面でも保守的で、目に見えない規制を受けていた。それがベトナム戦争が始まって数年のうちにその規制が一気に崩れていった。1969年に「イージーライダー」が公開され、1971年の「ダーティーハリー」、1972年の「スケアクロウ」、その後は「レニー・ブルース」、「カッコウの巣の上で」等々、言葉に関しては解禁状態になった。アメリカ映画を観る我々は急激に辞書にも出ていないような語彙にさらされる事になったのである。

映画字幕の仕事に携わる人は、「映画字幕翻訳家」と呼ばれる事が多い。しかし、清水俊二氏の持論はスーパー字幕は翻訳ではない、ということである。清水氏は新聞のコラムを担当することになった時、肩書きをどうするか編集部と相談し、彼の肩書きは「外国映画字幕監修者」

となった。清水氏は自らの肩書きにこだわったのは、この機会をとらえてスーパー字幕は翻訳ではないということをはっきりさせたかったのであろう、と自ら言われている。つまり、語学が達者であるということだけでは字幕は作れないという事である。外国映画の字幕はしゃべられている台詞を正確に翻訳しても通用しない。書物では読み返すこともできるし、途中で考えることもできる。字幕の場合は瞬時に現れ、瞬時に消える。そこで考えなければならないような字幕だと、考えている間に次の字幕が現れ、頭の混乱を招くことになる。観客がすっと読め、すっと理解できるようなものでなければいけない。字幕作りの難しいところである。ある時、清水氏は「字幕スーパーの文法」というタイトルで原稿を依頼された。そこで彼は「文法」という言葉を辞書で調べると「文章を作る上のきまり」とあり、外国映画の台詞を日本語の字幕に置き換えるときのきまりが字幕スーパーの文法であると理解した。「字幕スーパーの文法」は外国語を日本語に翻訳するための文法ではなく、外国映画の原文を観客にわからせるための文法でなければならない。それが字幕作成上のルールということである。戸田奈津子氏が字幕の仕事に興味を持ったきっかけではないか、と思われているのは高校時代に観た「第三の男」だそうである。戸田氏はその映画にしびれ、字幕を記憶するほど繰り返し観たそうである。ジョセフ・コットンが扮する三文文士が戦後のウィーンを訪ね、親友のハリー・ライムがすでに死んでいることを知った。その状況に納得がいかない彼は友の死の真相を調べはじめる。あるナイトクラブで彼はある人物に会い、「事件には第三の男がいたようだ。」と言うと、相手は嫌な顔をして「今夜の酒はあれそうだ」という。その部分のもとの台詞は、“I shouldn't drink it. It makes me acid.”である。この字幕に接して、戸田氏は字幕とは台詞を直訳するのではなく、台詞のエッセンスをうまく日本語に置き換える面白いものであることを知ったそうである。この字幕はいまだに名訳として語り継がれているという。ちなみにこの名訳の主は秘田余四郎さんということである。戸田氏があげているもう一つの脱帽ものの名訳は高瀬鎮夫氏によるバーブラ・ストライサンドのミュージカル、「ハロー・ドーリー」である。映画の最後にナレーターが彼女の生涯を、“She was a Pied Piper.”と締めくくったそうである。Pied Piperとは「ハメルーンの笛吹き」のことであり、ドイツの伝説上の人物で、以来、人々の先頭に立って派手に人々を煽る人物の事を“Pied Piper”というのだそうである。この短い台詞の字幕には、「彼女のお祭り人生」と出た。高瀬氏はこのようにきらめきのある名字幕を多く世に送り出されたとのことである。名訳であまりに有名なのは、「カサブランカ」の“Here's looking at you, kid.”「君の瞳に乾杯」であろう。

映画制作者は作品が字幕で読まれることを想定して映画を作っているわけではない。その原語を理解する観客が楽しむ事を考えて作っているので、字幕を読むという作業は全く余分なものである。そこで映画を楽しむことを邪魔するような字幕は良い字幕とはいえない。映画を観る観客はスクリーンで語られるドラマの世界に自分の身を置く。映画は観客の要望に応え、そして製作者が自分の考えを反映させるメディアである。映像、音楽、音響、美術等々、映画を作り上げる要素の中に字幕が入ることになる。最も大切な事は、映画が言わんとしていること

を的確に掴み、それを出来る限り忠実に、効果的に、観客に伝える事が何よりも重要な使命である。シナリオは一言一句練られているものであるから、そのまま日本語に置き換えられることが望ましいが、様々な制約のもとで、それはできない。映画を観ている人々は字幕を読むのではなく、ちらっと目で見て内容を掴む。ちらっと目を走らせるだけで内容がわかる文章でなければならない。そして本来の目的である画面を楽しむ充分な時間を観客に与えるのである。限りなく原文に近く、しかも読んですっと理解され、字幕として成り立つ日本語を捜してゆく努力が字幕作成の基本である。字幕作成に興味を持ち、字幕作成者になりたいという志願者が多いそうであるが、清水俊二氏は字幕作成を仕事にするためには、語学のほかにいくつかの条件があると言われる。1．映画を愛し、映画を理解する力をそなえていること。　2．日本語、とくに話し言葉に熟達していること。　3．百科事典的な雑知識に好奇心を持っていること。

我々は何気なく、あって当然のごとく字幕を読み、映画を楽しんでいるが、映画の字幕をつける作業はこのように地道で、骨の折れる仕事なのである。

3．映画字幕の実際

日頃、映画を楽しむ時、とりたてて意識せずに読んでいる字幕を今回は詳しく見ていくこととする。莫大な数に及ぶ外国映画の中から今、英米語学科の授業で共通の教材として使用している“Shall We Dance”を取り上げ、字幕のうちから一部だけではあるが台詞を取り出して内容の詳細を見ると共に、英語学習用教材としてどのような形で利用できるか見てみたい。

“Shall We Dance”は周知のように、日本で周防正行監督、役所広司、草刈民代主演で1995年に公開されたものを、ピーター・チェルソム監督、リチャード・ギア、ジェニファー・ロペス主演で2004年にアメリカでリメイクされたものである。日本版は当時日本のみならず、外国でも高い評価を得た。そのためか、アメリカ版はシチュエーション、台詞も日本版をほぼそのまま生かして制作されている。日本版も英語の字幕の付いたDVDが発売されているので、こちらも日本語の表現が英語ではどのように言い表されているか非常に興味もあり、又、英語学習用の教材としての利用価値も高いであろう。ちなみに、このアメリカ版の字幕をつけているのは戸田奈津子氏である。

<u>Shall We Dance</u>

Link:	Yes! That's it! That's it! That's what we needed.	いいぞ！　その気合だ！
John:	Hello. I'm home.	ただ今！　帰ったよ！
Bev:	Don't wait up.	先に寝て！

John:	Oh, my God. What are you doing? What are you doing?	何してる　お前　正気か？
Bobbie:	OK, don't do that.	ヘンよ
John:	Do what?	
Bobbie:	Standing there looking dumb.	中年男が　そこにボサーツ！
	It's just not cute in a guy your age.	
	Be a doll and help me carry my clothes.	それ　上に運んで
Vern:	You beginning ballroom?	初めてかい？
John:	Yeah, looks that way. Yeah.	まあね
Chick:	Guys dancin' with guys ain't my kinda	男と踊るシュミはない
	thing, you know? No offense, sir.	気にしないで
John:	None taken.	しないよ
Chick:	See the slinky one with the eyebrows?	あのナイス・バディのコ…
	That's me ? if you don't mind.	おれが頂くぞ　いいだろ？
	I know you won't mind.	
John:	Be my guest.	ご自由に！
Bobbie:	Ouch.	お気の毒！
	Memories of high school, huh, boys?	高校でもフラれっ放し？
Bobbie:	So… that leaves you.	それで？　あなたは？
John:	Leaves me? How? What?	僕が何か？
Jenna:	Dad work late tonight?	残業なの？
Bev:	Yeah, looks that way.	そうみたい
Jenna:	Guess whatever he's working on,	ノッてる仕事みたい
	he must like it.	
Bev:	Why do you say that?	どうして？
Jenna:	He seems happier lately.	最近　幸せそう
Bev:	Does he?	そう見える？

Bev:	You got home by five?	あなたは５時に？
	How did you manage that, you lucky dog?	羨ましい
	Ah, there's the door.	玄関が開いたわ！
	OK. See you. Bye.	じゃあね
Mitzi:	Let go, John.	勇気をだして！
	That's it, John.	その調子！
Bobbie:	So are you really	本当に‘タイムズ’の記者？
	a reporter for The Times,	それとも彼女がお目当て？
	or are you just pickin' up on her,	
	like everybody else?	
Scottie:	I'm a reporter.	記者だよ
	Plus, she's not my type.	それに女はやせ型より
	I like a woman built for comfort,	グラマーな方がいい
	not for speed.	
Bobbie:	Really? Why don't you put the camera	それマジ？
	down and take me out on the dance floor?	カメラを置いて
		あたしと踊って
Paulina:	Mr. Clark, I take dance very seriously.	ダンスは私の命なの
	Miss Mitzi's is a school, not a disco.	教室はディスコじゃない
	And I hope you didn't join class	私と付き合うのが目的なら
	with me as your goal,	悪いけど時間のムダよ
	because you'd be wasting your time.	ダンスを口実に使わないで
	Don't dance if that's what you're after.	
John:	Sorry I'm late.	遅刻だ
Mitzi:	Don't let it happen again.	時間は　ちゃんと守って
Vern:	Look, I was gonna lose some weight first,	まず体重を落として
	and then I was gonna take her dancing	彼女をダンスに誘って
	somewhere romantic.	どこかロマンチックな所で
	And then maybe pop the question.	プロポーズしようっと

Mitzi:	Bobbie needs a partner for the competition.	ボビーと競技会に出る
	Why not you, John?	パートナーは？
		あなた　どう？
John:	Me? Competition? No, no, I can't…	僕が競技会に出る？
	She'd never go for it anyway. Forget it.	冗談だろう？
John:	Hey, listen…	とにかく
Link:	What?	
John:	Come back to class.	またクラスへ
Link:	No.	
John:	You could take over as Bobbie's partner	ラテン・ダンスで
	in the Latin dances.	ボビーの相手を
	You've got those knocked already.	君はラテンをマスターしている
	There's no way I could learn 'em in time.	
Link:	I'm not comin' back	おれがボビーと組む？
	as the Bobbinator's partner!	
	We'll look like an olive	カボチャと楊枝のコンビだ
	and a toothpick together.	
	Besides, she would never dance with me.	第一　彼女がいやがる
John:	Sure she would.	大丈夫
	Just the Latin dances.	ワルツとクイックは
	I'll still do the waltz and the quickstep.	僕が踊るから
	She would.	承知するよ！
Link:	Nice. Invite the lady in.	レディーを引き寄せ
	And… make the connection.	気持を通わせる
	Projecting to the third balcony.	３階まで視線を投げる
John:	911! 911, quick!	大変だ！救急車を呼べ！
	Quick, 911! 9…	早く救急車を！
John:	We wanted something unusual.	決めすぎた　大丈夫？
	Are you OK?	
Bobbie:	Yeah.	大丈夫
John:	You sure?	
Bobbie:	No, I'm good.	２人とも

	But you guys look exhausted.	バテバテの顔だわ
	I tell you what, why don't we call it a night?	今夜はこれで止めましょう
	You know, for your sake, John.	よく休んで　ジョン
	You look like you're toast.	
	And tomorrow's a big day.	明日のためにね
John:	Yeah.	
John:	Get home safe.	じゃ　気をつけて
Bobbie:	OK.	
Paulina:	I'm wearing you guys out.	やりすぎた？

(Paulina)

I hope you're not upset about	大会の　あのことは忘れて
what happened with you and Bobbie.	
Because you were wonderful that night.	すばらしいダンスだったわ
I'd hate to think that what happened	あんなことで
would make you give it all up.	ダンスを　やめないで
You looked so graceful	エレガントで勇敢な
and brave out there —	あなた
a different person from the one	初めてクラスに現れた
who first walked into Miss Mitzi's studio.	あなたとは別人
But a lot has changed for both of us	この数ヶ月で
over the last few months.	私たちは変わったのです
When my partner and I	去年の
went to Blackpool last year,	ブラックプールでは
we were so excited	私は優勝しか頭になく
to make it to the finals.	
Everyone was convinced	周囲も私たちが優勝すると
that we were going to win,	思っていました
and we wanted to prove them right.	
We'd been together as a couple	公私共にパートナーだった
for as long as we'd been partners.	私と彼は
But we began training too hard,	優勝を望むあまり
pushing each other, expecting too much.	互いを駆り立てあい
	練習に身を削りました
Well, we didn't win.	でも優勝どころか

Not even close.	みじめな結末
I came back	トロフィーも持たず
without my trophy or my partner.	彼も失って帰国しました
And all this time	以来　私は
I've been hiding out at Miss Mitzi's,	あのスタジオに隠れ
angry at myself,	自分への怒りと恥を
frustrated and embarrassed.	噛みしめていたのです
But coaching you and Bobbie,	でも教師として
seeing how alive you were out there,	あなた方の輝きを見て
made me realize	自分の弱さに気付きました
just how much I'd given up.	
And now,	そして今　久しぶりに
for the first time in a long time,	あの気持が甦ったのです
I want to dance again.	「また踊りたい！」と
So I need to thank you — thank you	あなたの　お陰です
for helping me to see this.	その気持を下さった
I hope I get to see you and dance	発つ前に　もう一度
with you once more before I leave.	お会いできて踊れたら…
Paulina	ポリーナ

日頃あまり意識していない字幕であるが、注意してみると字幕作りのテクニック、こつ、というものが見えてくる。字幕を作成する上で最重要なことは清水氏も戸田氏も言われているように、観客が抵抗なく読めて内容がわかる、ということであるから、内容理解にさして関係のない箇所はスッパリと省略する、そのかわりに台詞の裏にあるニュアンスを伝えるために、台詞にない言葉も字幕では付け足す、という場合が多い。例えば、省略する例としては次のような箇所があげられる。

Bobbie:	OK, don't do that.	ヘンよ
John:	Do what?	
Bobbie:	Standing there looking dumb.	中年男が　そこにボサーッ！
	It's just not cute in a guy your age.	
	Be a doll and help me carry my clothes.	それ　上に運んで

これを見ると字幕が翻訳でないことがよく分かる。しかし、もとの台詞のイメージを確実に伝えている。次の例も同様に、長い台詞のため忠実に日本語にするにはとても文字数が足りな

い。そこで必要のない所は削り、不釣合いであるというたとえで使われているan olive and a toothpickをカボチャと楊枝と言い替えてある。前述のように戸田氏は漢字の使用に関しては制約があるため、「僕」は使うが、「俺」は使わないと言われていたことがここで証明されている。また、どうしても漢字を使ったほうが良い場合は、漢字にルビをふるということであったが、氏の言葉通り、「楊枝」、「発つ」にはルビが付いている。

John:	You could take over as Bobbie's partner	ラテン・ダンスで
	in the Latin dances.	ボビーの相手を
	You've got those knocked already.	君はラテンをマスターしている
	There's no way I could learn 'em in time.	
Link:	I'm not comin' back.	おれがボビーと組む？
	as the Bobbinator's partner!	
	We'll look like and olive	カボチャと楊枝のコンビだ
	and a toothpick together.	
	Besides, she would never dance with me.	第一　彼女がいやがる
John:	Sure she would.	大丈夫

台詞にないものを内容を的確に表現するために字幕では付け足してある例としては次のものがあげられるであろう。

John:	Oh, my God. What are you	何してる　お前　正気か？
	doing? What are you doing?	
Bobbie:	Ouch.	お気の毒！
	Memories of high school, huh, boys?	高校でもフラれっ放し？

"Shall We Dance" の最後に近いシーンでPaulinaからJohnに宛てた手紙が登場するが、この部分は映画の中でも重要な位置にあるため、その雰囲気をこわさないようにほぼ元の会話に近い形で字幕が作られている。ナレーション形式で会話ではないことから、時間的余裕があったことが影響していることも考えられる。

4．おわりに

外国語学習の教材としての映画は様々な方法で利用することが出来る。主として聴解力を伸ばす面では非常に有効なものであるが、同時に字幕を利用して表現の習得にも効力を発揮する。日常よく使われる表現、例えばI'm home. Be my guest. Ah, there's the door. なども何度

も耳にすることによって馴染むことになり、必要時に使えるようになるであろう。また、

Bev:	Don't wait up.	先に寝て！
John:	Sorry I'm late.	遅刻だ
Mitzi:	Don't let it happen again.	時間は　ちゃんと守って

のように、同じ内容でも英語の表現をそのまま日本語に置き換えるのではなく、ごく自然な日本語に直す、ということも学ぶことが出来るであろう。そして、

John:	911! 911, quick!	大変だ！　救急車を呼べ！
	Quick, 911! 9…	早く救急車を！

のシーンではアメリカでは緊急時に日本の110番、119番に相当する911番に電話をするということを学ぶであろう。周知のように映画は外国語学習用教材として、工夫次第でいかようにも効果的に利用することができる有難い存在である。

【参考資料】

「映画字幕五十年」清水俊二著　ハヤカワ文庫　2001年10月
「映画字幕は翻訳ではない」 清水俊二著　早川書房　1999年４月
「字幕の中に人生」 戸田奈津子　白水社　2003年６月
映画 “Shall We Dance”